二〇一八年一二月一日（WEB句会：参加者二六名）

倒木に塞かるる岨の落葉道　せいじ
墳丘へ空真空なる落葉径　ぽんこ
足裏に確かな温み落葉踏む　うつぎ
一穢なく落葉掃かれし石だたみ　あさこ
朴落葉大いなるもの拾ひけり　たか子
交差点落葉も吾も急ぎ足　なおこ
大文字山に展けて古都小春　せいじ
燦々と木洩れ日の射す落葉道　智恵子
ゆくりなく師の句碑に会ふ宮小春　うつぎ
とりどりの色落葉踏み磴登る　満　天
大和路の甍の波へ柿落葉　もとこ
孫たちと至福の時や庭小春　かつみ
紺碧の瀞へ散りこむ色落葉　うつぎ
踏み入りて嵩に驚く落葉道　こすもす
銀杏散る六百年を永らへて　あさこ
嵩高く落葉が覆ふ皇子塚　明日香
斑鳩の笑ひ仏や野路小春　はく子
降りしきる銀杏落葉に翁句碑　菜　々
神木の洞に落葉の吹きだまる　小　袖
猫どちら屋根に集合寺小春　たか子
小春日や紙飛行機の大回旋　さつき
眼帯の夫と手つなぐ道小春　なつき
湖小春外輪船より周航歌　菜　々
落葉踏む音にリズムの生まれけり　わかば
馬の背をゆく人影や山小春　わかば
銀翼の機影がよぎる空小春　よし子
校長の日課や門の落葉掃く　やよい
廃屋を覆ひつくせる落葉かな　宏　虎
朝掃きて夕べまた掃く落葉かな　三　刀
高札場仰ぐ箕面の辻小春　よう子
清流の流れにのりし落葉かな　よう子
嫁姑話しの弾む縁小春　菜　々
墓守と野良猫談義苑小春　たか子
神の杜嵩の落葉に鎮もれる　はく子
嬰児を抱けば笑へり小六月　よし女
ランナーを追ひ超す風の落葉かな　よし女

吟行句会みのる選

二〇一八年一二月一日（WEB句会：参加者二六名）